

ウランチュールトごみ処分場の向こうには、年々拡大するゲル地区が広がっている



ウランバートル市の中心部チンゲルテール地区で行われているごみのベル収集システム。初めて導入された日本のごみ収集車から流れる音楽を聞いて、住民がごみを出しに来た



ウランチュールトごみ処分場のウエイストピッカーたちの多くは、かつて遊牧民だった。社会主義から資本主義への変革や、雪害による家畜の全滅などにより、今は廃棄された有価物を換金して生計を立てている

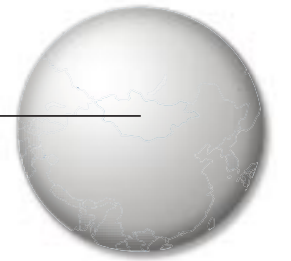
# FIELD SKETCH

## 自然に優しい ごみ管理システム を目指して

市場経済化とともに都市部への人口流入が進むモンゴルでは、首都ウランバートル市でごみの量が激増し、その適切な管理が大きな課題となっている。長期的な視野で、自然に悪影響のない廃棄物還元システムを目指すウランバートル市に対し、JICAはどんな支援を行ってきたのか。

文・写真 = 谷本 美加 (写真家)  
text and photos by Tanimoto Mika

モンゴル  
MONGOL



ウエイストピッカーたちのIDカード。彼らは以前、身分を証明するものを何も持っていなかった



### 深刻化するごみ問題

「ごみ処分場に行っても、最初は『何しに来たんだ！ 帰れ』とウエイストピッカーたちに石を投げられ、車から降りることさえできないときもあつたんです。彼らは自分たちのことを最低の人間だと思っているから、なるべくほかの人と接したくなかったのだと思います」

ウランバートル市役所廃棄物管理課のデ  
ルゲルバヤルさんは、ウランチュールトご  
み処分場の緊急改善パイロットプロジェクト  
が開始された2005年のことを振り返

り、そう話した。ウエイストピッカーとは、  
ごみの中から、缶・瓶・ペットボトル・プ  
ラスチックなどの有価物を拾って換金し、  
生計を立てている人たちのことだ。

今では、ごみ処分場のフェアトレードイ  
ングセンターに入ると、まずはウエイスト  
ピッカーのリーダー、セレーテルさんと、  
しっかりと握手をしてあいさつを交わすよう  
になった。

「ウランバートルでは、10年前に比べてご  
みの量が激増しました。今はこのウランチ  
ュールト処分場にウランバートルの70%の  
ごみが捨てられています。ウエイストピッ  
カーも増えました。1993年ころは、20人

くらいしかいませんでした」とセレーテ

ルさんは自分の職場について説明する。

90年以降モンゴルでは、民主主義体

制への移行と市場経済化が進められて

きた。特にこの10年、飲食店や小売店

などサービス業の増加、地方からウラ

ンバートル市への人口流入などにより、

廃棄物の量が増え続けている。輸入品

が多いこの国では、プラスチックや紙

ごみが非常に多く、それらは、処分場

とは名ばかりの丘陵の凹部に、ただただ

集積されていた。ビニールや紙ごみは風

で飛散し、周辺一帯にごみが散乱するこ

う状況だったのだ。



ウランバートル市は、地方からの人口流入に伴い、無秩序に形成されたゲル地区が拡大し続けている。冬は、ゲルで暖房に使用する石炭が灰となり、ごみとして排出される

そして01年、モンゴルは廃棄物管理にかかわる問題を解決するため、日本へ協力を要請した。JICAの開発調査「ウランバートル市廃棄物管理計画調査」が始まり、05年にウランチュールト処分場を緊急改善することになったのだ。

### ウエストピッカーと対話を重ねて

廃棄物管理の研修のため、日本で何カ所ものごみ処分場やリサイクル工場を視察したデルゲルバヤルさんは、「日本は土地代がかなり高いですから、埋め立てより焼却処理のほうが低コストです。しかしモンゴルでは、焼却処理はランニングコストがかかり過ぎます。広大な土地があるので、衛生的埋め立て処分方式がウランバートルでは適しているのです」と話す。だが、実は処分場の緊急改善において、最も時間と労力を費やしたことは、ウエストピッカーたちとの対話だった。

加えて、モンゴル独特のごみ問題もあった。地方からウランバートル市に移り住んできた人々が集まるゲル（移動式住居）地区では、冬の暖房に石炭を使用する。この石炭の灰は一般ごみと一緒に廃棄されるのだが、種火が混じって捨てられることもあり、ウランチュールト処分場では自然発火が頻繁に起こっていた。ごみが燃えることでダイオキシシンが発生し、土壌汚染の影響も始まっていた。



チンゲルテエ地区の住民集会で、プロジェクト開始前と後のごみ収集の様子について説明するウランバートル市廃棄物管理課のデルゲルバヤルさん(左)とたち。住民からもごみ収集システムに関する意見が出され、青年海外協力隊員も一緒に耳を傾ける

ロットプロジェクトは、すでにモンゴル独自のアイデアを取り入れ、今では新規処分場建設計画へと向かい始めている。

### 「み出し・回収の習慣が根付く」

一方、ウランバートル市の中心部にあるチンゲルテエ地区では、アパートの間を日本のごみ収集車が、日本の童謡やモンゴルの歌謡曲を流しながらゆっくりと移動していく。

「1日でもごみ収集を休むと、あちこちから苦情の電話がかかってきて、早く回収しに来てくれていると言われるんだ。ごみ収集車の音楽が聞こえるまでごみを出さないという習慣がついてきたから、チンゲルテエ地区はとてもきれいになっていますよ」

そう話すのは、日本から贈られた中古の「



ウエストピッカーの中には子どももいる。廃棄物管理システムは改善され始めたが、まだまだ課題は多い

み収集車を運転するチョロンバットさん。わずか数カ月間で、ごみ収集車といえばダンブカーだった。それも、ウランバートル市民90万人が排出するごみを効率よく回収できるだけの車両がなく、常にアパート地区のダストボックスにはごみがあふれていた。ごみ収集車はいつ来るか分からず、そのうちごみは風で飛ばされ、ウエストピッカーが有価物を求めてあさり、散乱している状況だったのだ。

そこで、「ごみ収集システム改善のためのパイロットプロジェクト」が06年から1年間続けられた。地域の住民代表が先頭に立って、何度も住民集会を重ね、プロジェクトの内容を説明し、パンフレットを手配りして、ごみ出しの日や時間を伝えてきた。

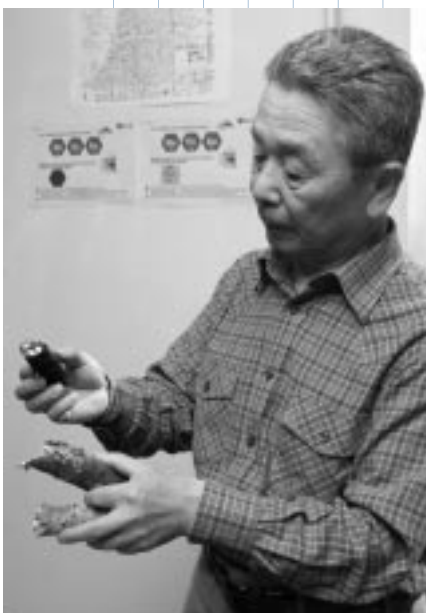
「実は当初、本当にみんながそこにごみを置

もあつた。しかし、ウランバートル市が抱えるごみ問題の解決と、衛生的埋め立て処分場計画の実行は、ウエストピッカーたちが協力してくれるか否かにかかっていたのだ。

「みんながやっていることは悪いことではないですよ。ごみの再利用の役に立っているのですよ」ということから話し始めて、ようやく理解してもらえようになりました。セレーテルさんは、誰も理解してくれなかったときに、ウエストピッカー一人一人に、衛生的埋め立て処分場計画について積極的に説明してくれたキーパーソンです」とデルゲルバヤルさんは言う。

現在、ウランチュールト処分場のウエストピッカーたちは、処分場で働く者としてIDカードを持ち、毎週ミーティングを開き、火消し当番を決めて処分場内での自然発火の消化活動もしている。

このように、開発調査の中で行われたパイ



プラスチック・紙ごみを原料にした固形燃料RDFを手にするシニア海外ボランティアの原義広さん。原さんはウランバートル市の廃棄物処理事業の支援に携わり、RDFの試験製造にも立ち会った

かなくなるとは信じていなかったんです。日本人たちが吹雪の中、鼻水を垂らしながら、一緒に積極的に説明をしてくれました。おかげで、住民もごみ収集システムが変わることを理解してくれ、ごみ問題に対する意識が高まりました。そして、ごみ収集車の運転手たちも、JICAの研修のおかげで、日にちと時間をきちんと守って回収に来てくれてます」と地域の住民代表は、プロジェクト達成の自信と、地域がきれいになったことへの喜びを笑顔で表す。

ウランバートル市の廃棄物管理マスタープランでは、2010年までに市民全員がごみ収集サービスを受けるようにし、2015年までには、全部のごみの15〜30%をリサイクルする。そして2020年には、自然に悪影響のない廃棄物還元システムを整備するという、大きな目標が掲げられている。このプランを実行に移していくには、これまで以上にさまざまなシステムを新たに導入することになりそうだ。「遊牧民がどこに移動しても生活していけるように、モンゴル人には適応能力があるのです」というデルゲルバヤルさんの言葉は、20年にもわたる遠大なマスタープランも実現可能と言っているようにも聞こえる。さて10年後、ウランバートル市はどのように変わるだろうか。



プロジェクトで作られた「ごみをきちんとごみ箱に捨てましょう」と書かれたステッカーは、ウランバートル市のデパートや飲食店などのごみ箱に張られている